

幸田露伴の少年文学「鐵の物語」初出の発見について

— 雑誌「実業少年」掲載

「人類世界の主権者たる鐵の面白き研究」(署名・鐵隠) —

吉田 大輔

はじめに

『露伴全集』は、現在までに三つの版がある。第一次『露伴全集』(一九二九—一九三〇)、第二次『露伴全集』第一刷(一九四九—一九五八)、第二次『露伴全集』第二刷(一九七八—一九八〇)である(すべて岩波書店から刊行された)。こうして三度の刊行を経るあいだに、それぞれの編集にあたった人々の熱心によって、幸田露伴(一八六七—一九四七)が書いた文章は、かなりよく収集・整理されたと言える。露伴の文章で、現在までに初出が未詳のままであるものは、そう多くはない。ただ、露伴研究の少なさと関連してか、不明のままになっているものもいまだある。もつとも新しい第二次『露伴全集』第二刷のうち『別巻 下』には、浦西和彦が作成した「幸田露伴初出目録」が収録されており、その最終頁には、「初出未詳作品」として約七〇ほどの文章が挙げられている⁽¹⁾(約七〇がまだ初出未詳というと思うられるかもしれないが、露伴が生涯に書いた文章は膨大で、割合として考えるとそう多いわけではない)。

こうした初出未詳の幸田露伴の文章のひとつが、本稿で取り上げる少年文学「鐵の物語」である。これまでの三つの全集すべてに収録されており、第二次『露伴全集』第二刷では、「第十巻 少年文学」の巻に収められている⁽²⁾。

初出未詳の文章が何に依拠して全集に収録されていたかという点、単行本である。第二次『露伴全集』第二刷、第十巻の「後記」に、「鐵の物語」は、幸田露伴『縮刷名著叢書 第五編 立志立功』(一九一五年、東亜堂書房、以下、本稿では『立志立功』と表記する)に収められた文章をもとにしていることが記載されている⁽³⁾。『立志立功』を確認すると、その序文で、露伴自らが「鐵物語は明治四十二年の筆」とたしかに書いている⁽⁴⁾。初出不明ながら、この露伴自身の言及をもとに、『露伴全集』は、執筆年を「明治四十二年」(一九〇九年)と推測してきた。ただし、これはあくまで推測であり、「鐵の物語」が『立志立功』収録以前に、どの

ような媒体にどのような形で発表された文章なのかは、現在までわかっていない。『立志立功』序文の「明治四十二年の筆」とある露伴の言葉、「筆」も、単に「書いた」という意味なのだから、「一九〇九年に書いてどこかに発表したものを『立志立功』に再収録した」という意味にも、「一九〇九年に書いたものの、どこにも発表していなかったものを『立志立功』刊行に際してはじめて収録した」という意味にもとれる。つまり、雑誌その他には未発表ということも想定しうる文章であった。第二次以降の露伴全集の編集に深く関係した、露伴の弟子・塩谷賛も「初出の場所も月も不明である」という⁽⁵⁾。

しかしながら、あたりをつけて筆者が調査してみたところ、幸いに幸田露伴「鐵の物語」の初出を発見することができた。本稿では、「鐵の物語」をめぐる研究状況とその変化を手短に触れたうえで、発見した露伴「鐵の物語」初出の詳細を報告したい。

一、「鐵の物語」をめぐる研究状況

露伴「鐵の物語」は、「物語」とタイトルにあるが、フィクションではない。一八八九年から一九一二年にかけて、露伴は啓蒙的な少年文学を多く書くが、この系譜に属する文章のひとつであり、鉄という物質を人類がどのように発見・利用してきたかを概観し、鉄利用の歴史を闊達に語った読み物である。

露伴のこの文章への考察を中心に据えた論文は、二〇二〇年五月現在、二〇一七年に筆者が書いたものしかない⁽⁶⁾。ごく簡潔にその内容を振り返っておく。一七七年に筆者が書いたものしかない⁽⁶⁾。ごく簡潔にその内容を振り返っておく。二〇一七年既発表の論文において、筆者は、露伴「鐵の物語」における西欧世界の鉄利用史への言及は、露伴の蔵書の中にあつた「John Yeats, *The Technical History of Commerce; or, The Progress of Useful Arts*, George Philip & Son, 1887」という英語文献を「翻訳」している部分が多いことを述べ、「東洋的」と考えられやすい露伴の作家イメージに反して、時として英語文献の利用が見られることを具体的に示した。ついで、この英語文献は、露伴の「翻訳」に先行して、明治政府の産業振興的な意図のもとに大島貞益（おだま せいえき）による翻訳が存在したが、大島訳に拠ったのではなく、露伴が自力で訳していたと推測できることも述べた。また、鉄という物質や鍛冶仕事という労働は、露伴の愛好した主題のひとつであることに触れ、さらに、こうした「もの」の発達史を書く試みは、「文明の庫」(一八九八)などで露伴がすでに行っていた仕事の「番外編」とでも

言いうる性格を持つ、と論じた。

筆者がこの論文を書いたあと、二〇一九年、橋本順光^{（7）}「欧垂にまたがる露伴—幸田露伴の参照した英文資料とその転用—」という論文が出た。現在まであまり検討されていない研究課題として、和・漢だけではなく洋に及んだ露伴の教養の問題がある。翻訳で触れたものも含め、露伴が読んだ西洋文献はどのようなもので、どのようにその影響があらわれているのか。これはおもしろい研究課題であるにもかかわらず、前田愛・湯沼誠二・平川祐弘などの仕事を除いて、こうした検討はあまりなされてこなかった^{（8）}。筆者の既発表論文の問題意識のひとつはそこにあり、気づくことのできた事例として、「鐵の物語」の英語文献利用を取り上げた。新しく出た橋本の論文は、こうした露伴の西洋教養をめぐる研究の空白を埋める、重要かつ網羅的な成果である。橋本の指摘は多岐に及び、いずれも示唆に富むが、その中で、前述の「鐵の物語」をめぐる筆者の見解に対して、橋本の論文では、*The Technical History of Commerce or The Progress of Useful Arts* 以外にも複数の文献を参照して「ただらうことが示され、たとえば露伴が「シーメンス、マルチン」とひとりの人物のように書いているのは、並行して参照したとおぼしきブリタニカの中にある「the Siemens-Martin Process」（シーメンス・マルタン法）という製鉄法の名を、蓄熱平炉を改良したウィルヘルム・シーメンスとピエール・マルタンという二人の人物から複合的につけられたものと知らずに書いたためではないか、という新しい見解が述べられている。たしかに、*The Technical History of Commerce or The Progress of Useful Arts* に「鐵の物語」の西洋の鐵利用史は、大部分をこれに依拠しつつも、時代が近くなればなるほど、この本にない記述がみられる点は、気になりつつも捨象して論文にしてしまっていた。この点、新しい研究状況として、ここに記しておく。

二、「鐵の物語」初出の詳細

本題に入る。筆者の二〇一七年刊行の論文では、「鐵の物語」初出を不明なまま議論を進めた。しかし、その論文の註^{（8）}において、「鐵の物語」の初出に関する推測をひとつ述べておいた。当時述べた筆者の推測は、以下のようなものである。『立志立功』には、「鐵の物語」をふくめて七つの少年文学作品が収録されている。そのうち、「鐵の物語」以外の六作品、「番茶會談」「供食會社」「人

事豫測表」「芥子大黒」「小農園」「米價問答」は、いずれも初出が明らかになっている。これらは、露伴の親しい友人だった石井研堂が編集した雑誌『実業少年』（博文館、一九〇八—一九二二）に、一九一一年から一九二二年にかけて掲載されたものであった。つまり、この本に収められたほかの六作品すべてが、『実業少年』という同じ媒体に発表されていた。筆者は、ごく当たり前の連想として「鐵の物語」の初出も『実業少年』のいずれかの巻にあるのではないかと推測できるがこの点は調査できていない、と書いた。

そう書いた後から現在まで、筆者は、幸田露伴と石井研堂の関係や、『実業少年』という雑誌に関心を抱き、調査を進めている。この雑誌の文化的意義については二〇二〇年刊行の別稿の中で触れたので^{（9）}、ここで長く繰り返すことはしない。『実業少年』は、上級学校への進学ができず労働に従事する少年を対象に、その実践的啓蒙を目指した興味深い雑誌でありつつも、所蔵している図書館が少なく、これまでにほとんど調べられていない。『実業少年』の所蔵が比較的充実しているのは、筆者の知る限り、国際子ども図書館、大阪府立図書館児童文学館、日本近代文学館、札幌大学図書館などである^{（10）}。二〇一八年、筆者は、札幌大学図書館に行き、一週間ほどかけて、同館に所蔵されている『実業少年』を調べてみた^{（11）}。すると、運よく、「鐵の物語」の初出を見つけることができた。のちに「鐵の物語」として一九一五年『立志立功』に収められた露伴の文章の初出は、筆者が確認したところ、次のようになる。書誌を挙げ、表紙と掲載頁の図版も併せて示す（以下、本稿の図版は、二〇一九年に古書店から入手した筆者所蔵の『実業少年』から撮影したものが、発見そのものは二〇一八年の調査の際に、札幌大学図書館蔵書によって得た）。

①鐵隠「人間世界の主権者たる鐵の面白き研究」『実業少年』第三卷第一四号、博文館、一九〇九・一二月、五八―六一頁 ※ただし目次では鐵隠「人類界の主権者たる鐵の趣味ある研究」とタイトルが異なって表記されている（図版1）（図版2）

②鐵隠「人類界の主権者たる鐵の研究」『実業少年』第四卷第二号、博文館、一九一〇・二月、四三―四七頁 ※こちらは、目次、掲載頁ともにタイトルは同一である。（図版3）（図版4）



(図版1) 『実業少年』第三卷第一四号表紙、筆者蔵

以上のように、二回にわけて掲載されていた。初出のタイトルは「鐵の物語」とは異なる。前半掲載時のタイトルは、「人間世界の主宰者たる鐵の面白き研究」(目次では「人類世界の主宰者たる鐵の趣味ある研究」)である。後半掲載時のタイトルは、「人間世界」が「人類界」に変わり、また、「面白き」が抜け、ふつうの「人類界の主宰者たる鐵の研究」になっている。後半掲載時には「面白き」がタイトルから省かれたとはいえ、この文章の最後の言葉は「これから先にまた何様なに進歩する事だらうか。面白い面白い。實に面白い」と鉄利用の進歩を言祝いで終わっている。署名は、「鐵隠」と書かれており、「露伴」とは書かれていない。しかし、文章の内容は、僅かな字句の違い以外、『立志立功』所収の「鐵の物語」と同じであり、ほぼ間違いなく幸田露伴の文章である(初出と単行本の字句の違いは、本稿末尾に示した)。露伴が『立志立功』序文で「明治四十二年の筆」(一九〇九年に書いたもの)と述べていたように、一九〇九年一月二日に『実業少年』に始めて載り、一九一〇年二月に、同じく『実業少年』に続きが掲載されていたことが確かめられた。

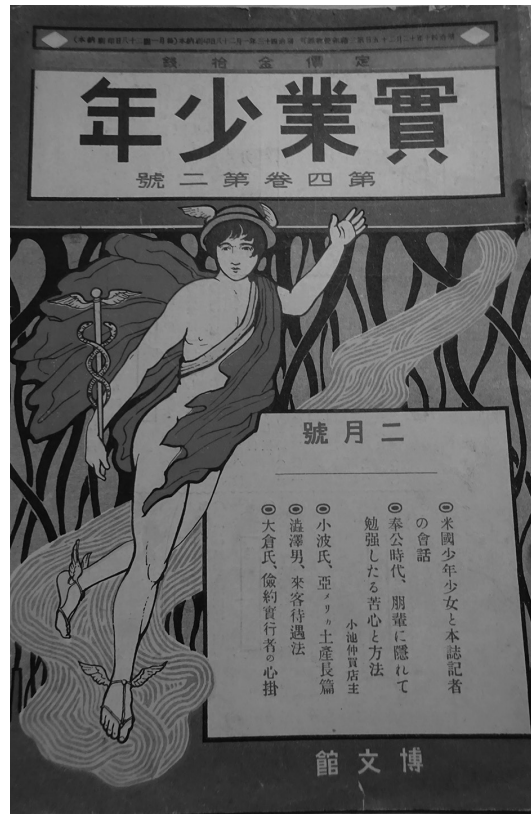
『実業少年』という雑誌は、先述のように、これまであまり調べられておらず、所蔵している図書館もかなり少ない。また、『立志立功』に収められた際のタイトル「鐵の物語」とは異なるタイトルで掲載され、「露伴」という署名で書かれ



(図版2) 『実業少年』第三卷第一四号、五八頁、筆者蔵

た文章でもなかったために、これまで気づくひとが誰もいなかったのだろう。「露伴」のほかにも、蝸牛庵、脱天子、乱筆狂子、雷音洞主などさまざまな雅号を露伴は使ったが、「鐵隠」という雅号を筆者ははじめて見たように思う(筆者が見落しているだけで「鐵隠」を露伴が用いた例はあるかもしれない)。「鐵隠」という雅号は、鉄利用史を少年向けに書くという文章の内容に合わせて用いたものだろうが、露伴(幸田成行)の幼名は「鐵四郎」なので、「鐵」という字に親しみがあつて使用したものであるだろう。幼い頃ともに遊んだ遅塚麗水(二八六七—一九四二)は、「幸田の鉄ちゃん」だったころの露伴の姿を生き生きと回想した文章を残している⁽¹²⁾。

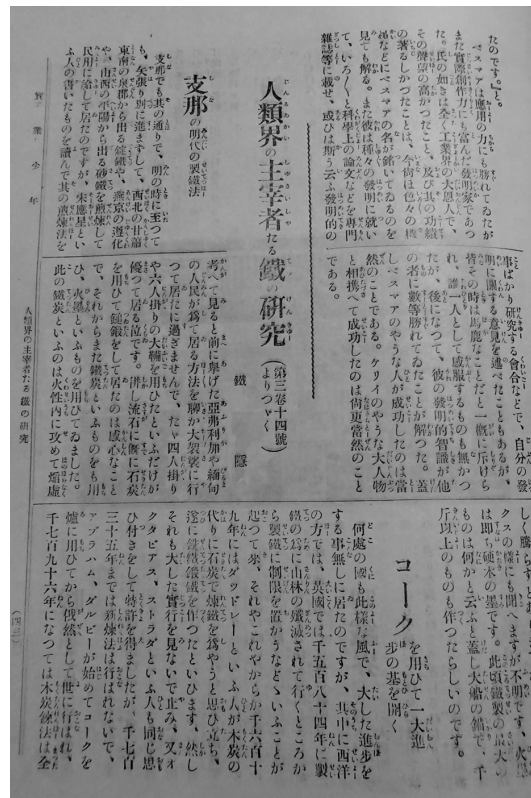
当時、『実業少年』の年少読者に、この文章を書いた「鐵隠」とはあの幸田露伴である、ということがわかったのだろうか。これが露伴の文章であることは、記事のどこにも書かれておらず、また掲載誌のほかの箇所にも示されていないわけではないので、ほとんどの読者にはわからなかったのではないかと思われる。『立志立功』や『露伴全集』の文章とは内容的にほとんど同じだが、やや目をひくのは、前半部掲載誌面の最後に、「次号より愈々、趣味湧くが如き快文となる」という予告文が置かれていることである。この予告文を書いたのはおそら



(図版 3) 『実業少年』第四巻第二号表紙、筆者蔵

く石井研堂だろう。この言葉を見ると、あらかじめ最初から終わりまですべての原稿が研堂の手にわたっており、スペースの都合で掲載を二回に分けたのではないかと思われる。なお、「次号」と予告されているが、実際は「次々号」に載った。

二回にわたる掲載では幾枚かの写真が併載されているが、露伴の文章と直接に関係しないものが同一頁にレイアウトされていることがほとんどである。「鐵の物語」前半部が出た『実業少年』三巻一四号では、露伴の文章とともに載せられているのは、「穴ほりのすき」「すき」とは鋤のことである」と「寒暖時計」の写真であり、これらはほとんど内容と関係がなく、この号のほかの記事とも直接の関係を見出しにくい。また、後半が掲載された『実業少年』四巻二号では、アメリカの秤屋と服地屋のショーウィンドーの装飾がどのようにになっているかの写真が二枚併載されているが、これも露伴の文章内容とはほとんど関係がない。ただし、こちらの場合には、この号に「巧みに窓飾する一例」という写真特集が設けられており、別の頁の記事とは関連が見出せた⁽¹³⁾。一枚だけ、鉄の利用史を書く露伴の文章の内容にはつきり呼応する写真もあった。四巻二号に併載されたヘンリー・ベッセマーの写真である(図版5)。同一頁に掲載された文章のなかで、ベッセマー転炉法を確立し、鋼鉄の生産量を飛躍的に拡大させたベッセマーについて、「其の後も引続いて種々の発明や改良が企図されたり遂行され



(図版 4) 『実業少年』第四巻第二号、四三頁、筆者蔵

たりして居りましたが、其の中終に彼の製鉄界に於て大功を立てたところのベスマアが出て来ました(中略)さうすると鑄鐵が炭素を適度に失ひ適度に興へられて鋼鉄になつて仕舞ふのですが、鋼鉄が容易に低廉に世間に供給されるようになったのは實に此のベスマアの発明に負ふ所が多いのです。」と露伴は書いており⁽¹⁴⁾、この文章に対応する写真が付されている。写真のキャプションには、「製鉄界の大発明家サアー・ヘンリー・ベスマア」とある。

それだけではなく、「鐵の物語」後半部が載った『実業少年』四巻二号には、露伴の文章の直前に、「ベスマアの発明と成功」という無署名記事が載っている。この記事は、ベッセマーと、同じく製鉄法の進歩に貢献した発明家・ウィリアム・ケリーとを関連させつつ、ベッセマーを主として、その生涯を簡潔に論じた記事である。このように雑誌の上で、記事同士を関連させて編集している様子も、後半部掲載時にはうかがえた。

終わりに

以上が、新しく見つけることのできた露伴「鐵の物語」の初出の詳細である。この発見によって、単行本『立志立功』に収められた露伴の文章は、すべて『実業少年』に掲載されたものであることも、付随的に明らかになった。『実業少年』にもっとも頻繁に文章を寄せた文学者のひとりとは露伴だったが、この雑誌



(図版 5) 『実業少年』第四卷第二号、四五頁掲載、ヘンリー・ペッセマー肖像写真、筆者蔵

への寄稿を再編集して成立したのが、一九一五年の『立志立功』という本だったようである。ただし、『実業少年』に露伴が書いた文章のうち、「甘味の三世」(『実業少年』一九〇八・三)や「磐根水之助自傳」(『実業少年』一九二二・七)のように、『立志立功』に収録されなかったものもある。『立志立功』所収「番茶會談」「供食會社」「人事豫測表」「芥子大黒」「小農園」「米價問答」「鐵の物語」という七作品の選択や編集、あるいはこの本の出版企画そのものが、露伴の意図をどの程度汲んだものかは、よくわからない。「鐵の物語」を除く六つの小説作品は、柳田泉のように「実業鼓吹小説」と呼んで似た志向を持つ作品群と考える見方もあり、これらが同じ本に収められていることに違和感はない⁽¹⁵⁾。さらにこれらに、鉄利用史を明るい文体で語ったノンフィクション「鐵の物語」を一つ加え、『立志立功』は編集・刊行された。『実業少年』に露伴が寄せた文章のなかで、「磐根水之助自傳」が収められなかったのは、これが、水を主人公にし水の姿の変化を水の一人称で描くという科学小説で、やや異質なためかとも思われ、これが外されたことは理解できるような気がするものの、この中に「鐵の物語」を入れるのであれば、砂糖の利用史を書く「甘味の三世」は収録されてもよいように思える。だが、「甘味の三世」は『立志立功』に収録されなかった。『立志立功』をめぐる、どのような意図で再録作品の選択がなされたのかは、いまひとつはつきりしない部分が多い。ただ、露伴は、『立志立功』序で、こう説

まれたら喜ばしいとして、「若夫れ此の巻を読む者、未来の世の吾人に須つもの甚だ多きを感じ、而して吾人の才を用る氣を役し力を致し徳を立つべき所以の地の甚だ大なるを會し、手に唾して起たんと欲するあらば、吾が志酬はれたりといふべき也」⁽¹⁶⁾と、この本を通じて世の中にいまだ達成されていない事業がたくさんあることを年少読者に感じさせ、「手に唾して起たん」と思ってもらえたら自分の「志」は「酬はれ」るのだと言っている。この言葉は、『立志立功』所収「番茶會談」の一節で露伴本人を思わせる「妙なる人」なる登場人物が語る言葉「萬一俺の談話によつて、未来に諸君の頭脳や手腕を待つて居る事業は非常に澤山あるものだといふことを諸君に感じさせることが出来れば、それで俺は満足するのです」を改めて言い直したような言葉である⁽¹⁷⁾。柳田の言う「実業鼓吹小説」六作品に加え、実際の鉄利用史のうえで発明や改良をなして活躍した人間たちを関連に語る「鐵の物語」は、思えば単に鉄の歴史を語っているだけではなく、その最後の部分では、新しい合金や鍍への耐食性を備えた鉄の改良などが語られ、「諸君の頭脳や手腕を待つて居る事業」について述べた部分をたしかに備えた読み物になっていた。「鐵の物語」が『立志立功』に収められたことは、創作作品六つとはまた別のかたちで「諸君の頭脳や手腕を待つて居る事業」を年少読者に想起させるものだっただろう。

註

- (1) 浦西和彦「幸田露伴初出目録」『露伴全集』別巻・下、岩波書店、一九八〇、四八七～五八二頁。このうち、最後の五八二頁に、初出未詳作品がまとめられている。
- (2) 幸田露伴「鐵の物語」『露伴全集』一〇巻、岩波書店、一九七八、四四三～四五五頁
- (3) 前掲露伴全集一〇、六五二頁
- (4) 幸田露伴『縮刷名著叢書 第五編 立志立功』東亜堂書房、一九一五、序塩谷賛「幸田露伴」中、中公文庫、一九七七、二二七頁
- (5) 吉田大輔「幸田露伴「鐵の物語」の英語典拠」『京都造形芸術大学紀要 Genesis』二二号、京都造形芸術大学、二〇一七・一一、五八～六七頁
- (7) 橋本順光「欧亜にまたがる露伴——幸田露伴の参照した英文資料とその転

- (8) 用「『大阪大学大学院文学研究科紀要』五九巻、大阪大学大学院文学研究科、二〇一九・三、五五〜九〇頁、筆者の論文への橋本の言及は、同、八〇頁前田愛「露伴における立身出世主義——「力作型」の人間像」『近代日本の文学空間 歴史・ことば・状況』新曜社、一九八三、一三四〜一五二頁、湯沼誠二「幸田露伴の『大氷海』」『語学文学』三六号、北海道教育大学語学文学会、一九九八、一〜五頁、平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』名古屋大学出版会、二〇〇六、一二一〜一三八頁および一八一〜一八七頁。岡田正子「幸田露伴と西洋 キリスト教の影響を視座として」『関西学院大学出版会、二〇一二、のように、キリスト教の影響という観点から露伴を分析しようとした成果もある。
- (9) 吉田大輔「幸田露伴「御手製未来記」における商業アイデア——その文歴史的・産業史的意味の一端について——」『比較文学』六二巻、日本比較文学会、二〇二〇・三、五一〜六五頁
- (10) 国立国会図書館や東大・明治新聞雑誌文庫などよりも、管見の限り、本文に挙げたこれらの図書館の所蔵が充実しているように思う。国立国会図書館デジタルコレクションには登録はあるが、二〇二〇年五月現在、インターネット公開はされていない。博文館関係の刊行物は、博文館創立者の大橋佐平・新太郎父子が設立した旧・大橋図書館の蔵書を引き継ぐ三康図書館の所蔵が充実しているが、ここにも『実業少年』はあまり残っていない。旧・大橋図書館蔵書は、一九二三年の関東大震災で多くが失われた。おそらくこのために、関東大震災以前に刊行された『実業少年』は、現在の三康図書館もあまり持っていないのだろう。
- (11) 札幌大学図書館が『実業少年』を多く所蔵しているのは、かつて同大学の学長職にあり、晩年、石井研堂へ強い関心を抱いていた山口昌男が、一九九八年の明治古典会に出ている揃いを購入していたという経緯による。山口昌男・坪内祐三「対談・石井研堂を語る」『彷彿月刊 特集・大博物学者・石井研堂の世界』一五巻七号、弘隆社、一九九九年七月、一三頁
- (12) 遅塚麗水「迎曦塾時代の幸田露伴」坪内祐三編『明治の文学』二 幸田露伴 筑摩書房、二〇〇〇、四六一〜四六九頁。これによれば、露伴と麗水は、一緒に勉強するほか、大砲や榴弾を自作し煉瓦の壁を砲撃したり、爆弾を作って大爆発させたりするなどして、仲良く遊んでいたようである。

- (13) 無署名「巧みに窓飾する一例」『実業少年』第四巻第二号、博文館、一九一〇・二月、一八〜一九頁、目次ではこの記事は「最も進歩したる窓飾りの写真」とあり、タイトルが異なる。
- (14) 鐵隠「人類界の主権者たる鐵の研究」『実業少年』第四巻第二号、博文館、一九一〇・二月、四四〜四五頁
- (15) 柳田泉「幸田露伴」中央公論、一九四二、四一四頁、なお柳田の言う「実業鼓吹小説」には「磐根水之助自傳」も含まれる。
- (16) 前掲露伴立志立功、序
- (17) 前掲露伴立志立功、一四七頁

【新発見の初出と単行本『立志立功』の異同について】

以下に、新発見の初出と『立志立功』とを見比べて、「鐵の物語」本文の目についた異同を示しておく。なお、句読点の位置や段落変えの箇所などの変更もあるものの、煩瑣になるため、字句を加筆・削除・変更している箇所のみしぼって記す。最初の「」に示しているのが『実業少年』掲載の初出の際の語句で、次の「」に示しているのが『立志立功』に収録された際の語句である。便宜的に、『露伴全集』一〇巻の対応頁数も記しておいた。

- ① 「最必要物の一で」↓「必要物の一で」(字句削除、『露伴全集』第一〇巻、四四三頁に
対応)
- ② 「埃及の昔は随分開明で有りましたが、知つては居たけれども」↓「埃及の昔は随分開明で有りましたが、埃及人は鐵を知つては居たけれども」(字句追加、同、四四五)
- ③ 「古い書物に堅硬性を有すべき銅合金の製造法を記したのが今日に存して居りますのみならず」↓「古い書物に堅硬性を有すべき銅合金の製造法を記したのが今日に存して居ります。周禮に六齊の記事が有りますのは、すなはち其です。そのみならず」(字句追加、同、四四五)
- ④ 「銅合金で作つたところの記事を歴史に遺して居りますし、それから」↓「銅合金で作つたところの記事を歴史に遺して居りますし、干将莫耶などは皆銅の合金の劍です。呉越春秋には五山の鐵精を采つて造るとありますが、それは文飾です。それから」(字句追加、同、四四五〜四五六)

⑤ 「其の知識が不足であつたことが」↓「其の知識が不足が有つたことが」(字句修正、同、四四八) ※この部分は、第二次『露伴全集』第二刷では、「其の知識に不足が」になっている。

⑥ 「鐵鉞を得玉ひたることでは有るまいか、と想像されるのです」↓「鐵鉞を得玉ひたることでは有るまいか、と想像される位です」(字句修正、四四九頁)

⑦ 「アブラハム・ダルビーが始めてコークスを」↓「アブラハム・ダルビーが始めてコークスを」(字句追加、同、四五〇)

⑧ 「西班牙人が亜米利加へ渡つた時に、土人が鐵器を持つて居たので喫驚して聞糺したらば天から得たと云つたといふ話がある隕石は天から落ちて来る間に他のものは燃え盡して、鉄とニツケル、コバルト等の鐵系統元素ばかりとなつて居る」↓「西班牙人が亜米利加へ渡つた時に土人が鐵器を持つて居たので喫驚した、聞糺したらば天から得たと云つたといふ話のものは燃え盡して鐵とニツケル、コバルト等の鐵系統元素ばかりとなつて居る」(字句変更、同、四五五)

※文中でも述べたように、本稿は、二〇一八年に札幌大学図書館で行った調査をもとに書いた。『実業少年』の閲覧の便宜をはかってくださった同図書館職員の方々、かつて『実業少年』の揃いを購入し、図書館蔵書として残しておいて下さった、故・山口昌男先生に感謝いたします。